

Goshin Moro

Supporters Club News Letter

03

茂呂剛伸後援会 会報

2016/05



北海道新幹線 開業式祝賀会で 道南いさりび鉄道線 縄文太鼓を演奏披露しました



2016年3月26日、待望の新幹線が北海道にやってきました。北海道新幹線の新青森-新函館北斗間並びに、並行在来線を継承する道南いさりび鉄道線の開業を祝う式典が函館国際ホテルにて同日開催され、茂呂剛伸と手鼓打伸世流門下のメンバーが演奏を披露しました。太古の昔から強く結ばれてきた北海道と北東北が新幹線によってさらにその結束を高めていく景気付けとなれば…そんな想いのもと全力を込めた縄文太鼓の響きに会の盛り上がりは最高潮に達し、満場の拍手とともに演奏を終えることができました。ありがとうございました。



インタビュー vol.3

世界が相手だ! 北海道からの 文化発信

樋泉 実さん

北海道テレビ放送(HTB) 社長

×

茂呂剛伸

司会・撮影・構成 ウリユウ ユウキ

多様性の大地で 文化を作っていくこと

・・・今回は、共に北海道・札幌を拠点に文化・情報を発信していくことを仕事とされている樋泉さんと茂呂さんのそれぞれの立場と経験から、この北海道をベースに日本の隅々、そして世界へ伝えていくことの面白さ、難しさ、そして意義についてお伺いできればと思います。

まず、樋泉さんは「思考の響界」で初めて茂呂さんの演奏をご覧になられたそうですが、その時の第一印象はいかがでしたか？

樋泉実さん コンセプトが非常に良かったと感じました。時計台自体が発信の場となったことに感動しました。

尺八をやっているのですが、お琴の先生となぜ「琴線に触れる」と言うのだろうかという話になって、言葉ではなく音を持つ力が楽器を伝わってブレイクし、それが人間の感覚的なところに共鳴していくということで、ここでもそれがマッチしたと感じました。それからずっと茂呂さんとお付き合いがありますが、言葉の力を必要としない根源的な発信力の強い印象があります。

茂呂剛伸 私には時計台という名所でエネルギーのある表現活動が行われることによって「磁場」を作りたい、今の北海道を知っていただきたいという思いがあって、「札幌国際芸術祭2014」の最後の一週間、信頼する表現者たちに集まっていただいてひとつの舞台、エネルギー体を作りました。私の新しい出発の第一歩をご覧いただけたことを大変嬉しく思っています。

樋泉 茂呂さんのパフォーマンスに共鳴し

た人たちが化けていくという感じがしますよね。それが言葉の障壁なく伝えていく音、音楽の力の強さだと思います。時計台は北海道命名150年の原点のようなところでもあるし、もっと遡ればアイヌ民族、縄文民族の人たちといった根源的な存在につながる・・・という象徴的なことだったという点で、芸術祭にふさわしい表現だったのではないのでしょうか。そうした表現が地元から誕生してきたのはとても嬉しいです、誇りになることです。

・・・お二方にとって、歴史や風土に根ざした北海道らしい、北海道ならではの文化とは何だとお考えでしょうか？

茂呂 開拓によって北海道が誕生してからもまもなく、そして、まだ150年です。今の世代に課せられているのは、先祖であるアイヌ・縄文の文化を尊重、融合し、現代に生きる私たちのアイデンティティ、ストーリーを持つことです。言葉に拠らない芸術、表現の力によってそれができていると思っています。

樋泉 北海道と名前がついて150年ですが、土地自体には縄文につながる歴史があります。私の部屋に北から見た北海道・アジアの地図がありますが、そういう目で考えていくと、北海道の風土やアイデンティティは150年で語るものではなく、またその150年も日本全国の人たちが作り上げてきたもので、しかもまだ途上です。だから本格的に今から文化を作っていく、それも日本の中ではなくアジアの中で考え、アイヌ、縄文の文化をバックグラウンドとして表現していく。これまでは東京から見た北海道に北海道の価値を置いてきたような気がするのですが、そのコンパスは明らかにアジアから見た北海道になってきている

し、アジアの中で際立つ風土がここにはあります。

表現、新しいものは多様性の中から生まれます。自分の価値は均一なものからは出てきませんし、いろいろな人、ものが集まってくるところからカルチャーが出てくるわけで、ようやく始まったのではないかと僕は思っています。よくある「北海道らしさ」は東京から見た「らしさ」であって、北海道が本来持っているポテンシャルは十分ワールドワイドで通用すると思います。今度白老に民族博物館ができますが、それは多様性を京都や奈良よりも古い歴史の上に堂々と作っていくということではないでしょうか。北海道が恵まれているのは、多様性の中に地域があるということです。だから新しい表現が生まれる余地があります。京都も渡来人たちが作った街ですし、江戸・東京も日本中の人が入り混じり、ブレンドして作ってきた歴史があります。いろいろな人たちが交流して作り上げて、ずっと継続して文化になります。まだまだ「北海道文化」を語るには早い気がしますし、ようやく緒についている、まだまだ可能性があるということです。

アジアの人たちと作る、 アジアに際立つ北海道

茂呂 HTBさんは海外に向けた北海道の情報発信番組『LOVE HOKKAIDO』を制作し、アジアからの目で北海道を見ることを実践されていますが、どういう経緯でスタートしたのでしょうか。

樋泉 "日本の中の北海道"から"アジアの中の北海道"として考える時代が早晩来ると、衛星放送やインターネットの発展を見

た時に強く感じ、発信していくことにしました。1997年からアジア向けの情報発信を始めました。当初は『北海道アワー』として台湾・香港・シンガポールを中心にスタートし、2013年からタイトルを変え、現在8つの国・地域、9億人に向けて毎週レギュラーで見ていただいています。

現在の『LOVE HOKKAIDO』は北海道の暮らしを伝えることをコンセプトにしています。美味しい食事やきれいな景色を…というのは北海道や日本の特徴でもなんでもないわけで、もっと普通の暮らしを伝えて欲しい、そういうことに力点を置いた番組作りをしています。

2000年代になって中国や韓国、ASEANの中間層が増え、日本にも来るようになったのは、映像の効果があると思っています。興味を持ったり行きたいと思っている人が番組を見てお越しになるという相乗効果が出ています。



茂呂 もっと深く北海道に興味を持ってもらうとか、もう一回行ってみたい、移住してみたいと思っていただくにはどうしたらいいかといえば、やはりストーリー付けですよね。

私は今後の北海道がアジアから見てどういう存在になっていくのかに関心があります。アジアからの観光客が多いオーストラリアは自分の国にいるかのような歓迎ぶりだそうです。北海道はどのようなスタンスでおもてなしをしていくのかという点で、アジアから見た北海道のイメージに寄り添ったスタンスか、アイヌ・縄文文化を元にしたイメージを作っていくのか…私は後者を選んでいます。北海道にこういう未来があれば…というお考えがあればお聞かせいただきたいと思っています。

樋泉 アジアの人たちはまず雪など自分たちのところのないものを見たい…というのがあろうと思いますが、こちらがそれに甘んじていると「北海道が好き」ということを勘違いしてしまい、他の地域に行ってしまうことになると思います。我々が持つおもてなし、引力は「暮らしの中で培った発信力、文化」です。最近のアジアの人は個人で、自分と北海道のアイデンティティに共鳴するもの、表現を探して来ます。その後ろに美味しい食事ときれいな景色があると

というのが魅力ではないかと思います。

我々の考え方の基礎にあるのは、アジアと北海道の人たちの顔と顔が見える関係を作っていきたいということです。顔と顔が見えていれば交流が生まれ、何かあった時には心配や応援もしてくれますよね。北海道がアジアの中の交流の場になっていけるようにしたいと思っています。

茂呂 今までは日本人として発信していたものを、北海道人として届け、北海道人として触れ合っていたとこの役目があるんですね。

樋泉 『LOVE HOKKAIDO』は、カナダ人と中国人のMCで外からの目線で見ると北海道を伝えています。自分たちの目線で作っていると「これすごいだろ」ということになってしまいます。国内で見ている分にはそう思っても、海外でその価値観が通用するとは限りません。価値は相手が決めるもので、素材を提供しながら価値作りをしていくという考えです。その前提となるのが顔と顔が見える関係であり、カルチャーギャップの中からスパークするものが生まれるのです。北海道の150年がブレンドして作ってきた一つの空間だとすれば、僕の考え、夢は「アジアの人たちが作っていく北海道」に、ということです。その中には当然アイヌや縄文の文化がありますが、それは日本のイメージの中で作ってきた歴史観でしかないのかもしれない。多様性をきちんと認めていけるのがこの北海道ではないかと思います。最近、逆の意味合いで「日本人のここが優れている」という見方があります。それは日本人だけで見ているとすごいかなとも思いますが、その価値は誰が決めているのか。日本の企業が苦勞しているのは「技術がいいから売れるんだ」という勘違いからです。技術を磨く力、表現していく力がないと市場は形成できません。僕はもっと多様な北海道を作っていけばもっと魅力的な地域になるし、そういうことのできる時代になったのだと思います。2011年にマニフェストとして「HTBビジョン 未来の北海道」を作っていますが、そこで見据えた2030年は北海道の人口が減っていく時期です。その中で「アジアに際立つ HOKKAIDO」になっていければいいと思っています。そこを支えていくには文化というものが不可欠です。

茂呂 新しい価値を過去の歴史を踏まえて創造する、ということですね。北海道はまだ発展途上にあるという考え方であったり、アジアから見た感覚であったり、それらが自分たちが前に進むエネルギーとして目線を広げて進んでいくメッセージを頂いたと思います。

全ては顔と顔が見える “広場作り”のために

茂呂 HTBさんは『水曜どうでしょう』に代表されるように日本中にファンがいる番組を制作され、またテレビ局の枠を超えた独自性ある活動を“北海道企業”としてされています。

樋泉 我々の企業理念の基本は“広場作り”です。2003年に作った「HTB信条」で「HTBは夢見る力を応援する広場です」という言葉を掲げています。『水どう』も広場作りです。番組やイベント、DVDで数万人、十万人近くの方々にファンになっていただいています。それを五十万人、百万人にするかということではなく、ある意味で顔と顔が見える関係を作る。イベントに行けば完全に同窓会ですよ。それは番組の4人の人たちも言っていますが、自分たちの世界観を分かってくれる人たちの集まりです。それをあざとく五十万、百万にするとコミュニティが崩れてしまいます。だから我々が作るものは全て“広場作り”です。五万人が多ければ五千人、一万人の共感を作っていく。茂呂さんのコミュニティがあるのは茂呂さんの価値観に共鳴した人たちが参加し共感するからです。

我々の事業は地域免許ですから、北海道が景気が悪いから東京でという構造ではありません。北海道から逃げられないわけです。自ずから地域と共に、地域に寄り添っていきます。『イチオシ!』で毎日取り上げている特殊詐欺の問題もそうですし、朝『onちゃん体操』をやっているのも、『水どう』でファンの人たちが年中掲示板に集うのも、藤村君(藤村忠寿ディレクター)たちがキャラバンして語り合うのもそうですよね。『イチオシ!まつり』も番組のPRではなく、番組と視聴者が集う広場を作るイベントです。そういうことがスムーズにできるのが大事です。全ては“広場作り”です。6チャンネルが広場なのです。

・・・こうしてお話を伺っていると、つながってきますね。HTBさん自体が枠を超えて、地域の皆さんと一緒に作る広場であるということです。

樋泉 我々の仕事はコンテンツを軸に広場を作り、そこが荒れないようにしていくことです。我々の責任はそこに安心して集まっていたただけることですし、共感がずっと継続することです。『水どう』は20年近く続いています。もう子ども連れ、親子3代くらいの方がイベントに来ています。音楽も若い時に聴いたものを今も聴きますし、自分たちの子や孫に伝わっていく…それがコミュニティです。茂呂さんの作る

ものはずっと残っていきますから、そこに表現の世界の奥深さがあります。

茂呂 私は幼稚園や保育園で、自分たちが遊んだ土で太鼓を作る指導をし、そこに縄文時代のように子どもたちが手形をつけています。まさにそれは残るものです。10年、15年後に彼らが場を作り共感してもらうことの積み重ねができればと思っています。

2018年、札幌の新たな顔として、HTBさんの新社屋を含む「創世1.1.1区(そうせいさんく)」にホールができます。そこで私はアイヌ・縄文文化と共に音楽・踊りを含めた舞台を創造して、海外からいらっしゃる方々に「これが俺たちのアイデンティティだ!」と言えるものを発信したいという強い思いを持っています。HTBさんが移られるにあたって、変わるもの、そして変わらないものは何でしょうか。

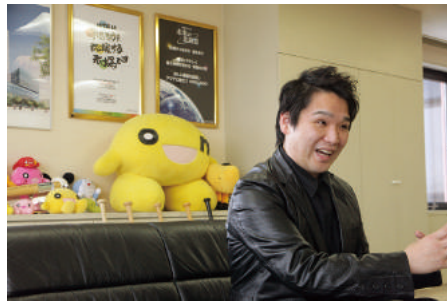
樋泉 場所は移っても、新社屋は"広場作り"の舞台装置です。社員・関係者たちがいろいろな人と交流しスパークして作っていきます。そして市民との交流もどんどん増えていく拠点になればと思っています。我々は放送局ではなく地域メディアであると規定しているのは、作ったものをエリア内では放送で出しますが、エリア外は「出口は問わない」からです。そういう意味ではまだまだやれること、やらなきゃならないことが数多くあるし、もっと北海道自体の高いポテンシャル、価値を磨く責任があるということです。

カルチャーショックで北海道を面白くしたい

茂呂 私も自分の腕を磨きに今年7月にフランスで公演を行います。以前おっしゃっていただいた「ブーメラン効果」を体現し、毎年繰り返して聞かせることで発信できればと思っています。

樋泉 僕は茂呂さんに「北海道のエンヤになって欲しい」と言いました。エンヤはBBCが2年間密着して作ったドキュメンタリーでブレイクし、それによって初めて"世界の中のスコットランド音楽"になったわけです。やっぱり言葉に抛らない芸術の力は大きくて、例えばスペインにはピカソがいるように国を代表する芸術家がそれぞれいます。"北海道はすごい"と言葉で伝わらなくても、一つの表現者が出れば北海道は注目されるし、もっと出てくれば北海道の価値は高まっていきます。そういう役割が表現者にはあります。音楽や絵画、演劇…映像も言葉はいらなくていいですね。北海道にある普通の暮らし、雪景色を見るだけで向こうの人々は感動します。雪まつりで

どもたちが雪玉を作ったりしてそれをSNSに流しているじゃないですか。それは言葉が必要としないメッセージだからです。



茂呂 これからの北海道は観光が中心にならなければならないですが、"北海道に行って一貫性のある文化を体感する"という考え方がまだないと感じます。劇団四季が食べていける舞台産業を確立したように、次に私たちは北海道のものでおもてなしする舞台を作っていかなければと思っています。

北海道からアジアに向けてという目線、そして発展途上の中でミックスし、ブーメランのように魅力を発信し続ける…やるべきことがいっぱいある我々は幸せだな、と感じます。私も成長を重ねていきたいと思っています。そして、樋泉さんの尺八もお聴きできる機会があればと思います!

樋泉 東京五輪・パラリンピックは日本の多様性をアピールする機会です。我々は多様性の真ん中にいますし、それはとても贅沢なことです。自分たちの表現を切り開き、発信しやすくなった今は"発信競争"です。発信しないと人は理解してくれないですし、可能性を磨き上げていくことはまだ途上にあると思います。

・・・その意味で北海道の表現者は必死にもがいて自分なりの発信を模索し、その成果がようやく芽を出しつつあります。今が北海道ならではの文化のスタート地点であり、チャンスの時期だと私も確信します。

樋泉 表現者がいなければ発信する道具があっても伝わりませんし、選択肢が増えた今はテレビも"作れば見てくれる"ということはあり得ません。作る力と伝える力をきちんと積み上げれば絶好のチャンスがあります。北海道はハンデを抱えてきましたが、東京から遠いという概念は何も無くなってきました。きちんとした価値作りをすれば動きますし、まだまだやらねばならないことはたくさんあります。

茂呂 ゼロから作るということではないですよ。

樋泉 仰々しく作るのではなくて、日常に価値があるのです。我々が海外に発信している裏返しは地域の価値の再発見です。東京が価値を作ってきた時代からアジアが価値を作る時代になったとすれば、その

価値作りをもっと丁寧にしていけば、アジア全体にもっと広がります。

茂呂 北海道の人たちに地域の価値、足元の価値の発信の大切さをメッセージしていくために必要なことは何でしょうか?

樋泉 特に次を担う世代の人たちはなかなか頼もしいと思っています。その人たちにきっかけを作っていくのがより上の世代の責任です。もっと一緒にやろう、発信しようと言っていくことができますし、彼らはそれを待っていると思います。地域には厳しいことがあっても可能性を作っていく世代ですから。

茂呂 勇気が出ました!「ユメミル、チカラ」の距離感は今日や明日ではなく、10年20年単位の未来を想像することなんだと思いました。北海道から発信することは一方向のものではなく、種を蒔き芽吹くのを待つ、そして柔軟な考え方で変化する、育んでいくということなんですね。

樋泉 多様性を認め、相手に敬意を表現しながら学んでいくことによって、共感ももっと広がっていきます。お互いが尊敬しあえないといいものはできないし、学んでいけばまだできることは数多くあります。

・・・お互いを知り、スパークすることから、言葉だけではない「想い」が伝わっていきます。今日のお話で買かれていた「多様性」、そして「広場作り」で、まだまだできることが無限にあると改めて感じました。

樋泉 カルチャーショックの回数を増やしていけばいいんじゃないでしょうか。人はそれで成長していきますし、茂呂さんもアフリカに行かれて、ずっと札幌にいたら出てこなかったかもしれない潜在的なものが引き出されたのでしょうか。そういうものをそれぞれが持っていますし、それらを混ぜていけばいいと思います。

茂呂 北海道、札幌にカルチャーショックがあふれていけば面白いですね。発信する側もそれを求めてきますし、予測し得ない場がそこに生まれると思います。

樋泉 茂呂さんにその先頭ランナーになっていただけたらと思います。



(2016.2.12 HTB本社にて)

縄文の響きを さらに大きく

茂呂剛伸後援会 1周年祝賀会・総会
フォトレポート

2016.4.21(木)
北洋銀行本店セミナーホール (札幌市中央区)

2016年4月21日(木)、茂呂剛伸後援会の発足1周年を祝い、祝賀会並びに総会を開催いたしました。平日にも関わらずたくさんのご参加を賜り、賑やかな雰囲気の中で開会。茂呂と親交の深い多彩なアーティストとの共演が華を添えます。日頃からのご支援に心からの感謝を込め、茂呂をはじめ門下メンバーや舞台スタッフが一丸となっておもてなしさせていただきました。

北海道・北東北の縄文遺跡で続けているプロジェクト、念願のフランス公演・定期演奏会、そして「北海道から発信する舞台芸術づくり」。茂呂の夢はさらに広がっています。これからもより一層の精進をお誓いするとともに、皆さまのご縁をさらに深めていく場となりました。

当日の様子を写真でお届けいたします。



会は河野紫(ゆかり)さんの華やかな三味線で幕を開けました



風間天心さん作の「水引」をモチーフとしたバルーンが上がり、茂呂が登場します



横内龍三 後援会長からのご挨拶。
日頃よりたくさんのお支えをいただき、ありがとうございます



荒川裕生 北海道副知事からのご祝辞。
北海道からの文化発信、これからもお力添えをお願いいたします



茂呂からこの一年のご報告とこれからの展望をお話しし、さらなるご支援をお願いしました



鷺ノ木遺跡での縄文太鼓の演奏。これまでも茂呂の活動を映像で記録し続けてきた小林幸王監督の撮影です



アイヌの伝統楽器・ムックリを演奏する川上さやかさん。
北の響きの出会い。茂呂の縄文太鼓との呼吸もピッタリです



横井隆 北海道マツダ販売社長からのご挨拶。
これからも愛車と太鼓とともに走り続けます



「djemp」(ジャンピ)揃い踏み、hajimeさんとのセッション。
時空を超えるかのような響きに心躍ります



嵐田登 北海道立近代美術館長からのご祝辞。
芸術の力をよりたくさんの人々に伝えていきたいと思ひます



今度は川上さん、hajimeさんと3人でのセッション。
魂を揺らし、北国の過去・現在・未来を想像させてくれます



小島紳次郎 ウェス社長からのご挨拶。
北海道発の音楽シーンを熱く盛り上げる意欲をいただきました



ここでサプライズゲスト! 祭あるところにこの男あり。
祭太郎さんが今日の晴れの日を祝福してくださいました



クライマックスは縄文太鼓隊のオンステージ。
目で耳で身体全体で感じる、迫力ある「縄文の響き」!



横内会長と共に皆さまに心からの感謝を申し上げ、
盛況裡に祝賀会・総会を締めくくりました



一同でお見送りさせていただきました。
また演奏会で、様々な場でお目にかかりましょう!



平成27年度 茂呂剛伸後援会会計報告

■収入

項目	金額	備考
年会費	504,000	84名×6,000円
利息	26	
合計	504,026	

■支出

項目	金額	備考
事務費	840	用紙・封筒代
会報印刷代	54,000	第1号
会報増刷分	8,640	第1号増刷
会報印刷代	54,000	第2号
郵送費	9,000	
支払手数料	810	
遺跡演奏費	17,316	森町演奏移動費
合計	144,606	

■収入 504,026円
■支出 144,606円
■残高 359,420円

次年度繰越金 普通預金(北洋銀行) 339,010円
次年度繰越金 現金手持分 20,410円

以上の通りご報告いたします

平成28年3月31日現在
茂呂剛伸後援会事務局

これからの会報発行予定

いつもご愛読下さしまして、ありがとうございます。

本誌は年3回の発行を予定しております。今後も茂呂剛伸の活動、親交のある方々との対談などを通じてより充実した内容を目指してまいりますので、よろしくご愛読のほどお願いいたします。

■vol.04…2016年9月下旬発行予定 ●特集…茂呂剛伸 in フランス ●インタビュー…小島紳次郎さん(ウエス社長)

■vol.05…2017年1月下旬発行予定 *内容・発行日は変更となる場合がございます

会報フランス語版ができました

7月に予定している初のフランス・パリでの演奏会に向け、本誌第2号を基にフランス語版を発行しました。

石森秀三さん(北海道博物館 館長)とのインタビューや、本号の北海道新幹線開業式祝賀会の様子を掲載しています。

ご希望の方は事務局までお知らせください。また、ぜひ現地のお知り合いにもご紹介ください。



茂呂剛伸後援会 ご入会のお誘い

縄文の響きを未来へ…そんな思いをより多くの人々に伝えていく茂呂剛伸の活動をより近くで支えていただけるよう2015年4月に発足したのが「茂呂剛伸後援会」です。

本会報のお届けやイベントへのご案内、チケットの優先販売等の会員特典がございますので、是非ご入会いただきますようお願い申し上げます。

【入会のお問い合わせ】FAX 011-200-2113・メール moro-t@mirai-t.com *茂呂剛伸後援会ご入会の旨、タイトルにお書き添えください

Goshin Moro
Supporters Club
News Letter

茂呂剛伸後援会 会報 第3号
2016年5月25日発行

発行者 茂呂剛伸後援会事務局

発行所 茂呂剛伸後援会

064-0804

札幌市中央区南4条西1丁目15-2 栗林ビル7階

株式会社オフィスマロ 内

デザイン ウリュウ ユウキ(クリエイティブワークス19761012)

TEL 011-200-2112

FAX 011-200-2113

moro-t@mirai-t.com

www.goshinmoro.com